

みちのく・むかし話

語り部 萩原淑子

2020年11月14日収録・日本民家園 旧岩澤家住宅

「うりこひめ」

昔々な、あるところに、じさまとばさま（※1）と二人で住んでいたと、じさま毎日山さ、ばさま毎日川さ洗濯に行ったんだと、あるとき、ばあさま川でゴシゴシゴシ洗濯していたっけ、川上のほうから、何か流れて来たんだと、

「ありやあ、何だべ」

と、思って、見たっけ、うめそうな、瓜。

「あーあうめそうだなあ」

って、拾って、

「さ、このうめそうなの、うちさ持って帰って、じさまと二人で食べるべ」

ってヨッコラショヨッコラショっとうちさ帰ったっけ、ちょうどじさまが山から下りてきて、

「じさまじさま、こんたなうめそうな瓜拾ったからす、二人で食べるべ」

「んだがあ、俺切ってやるからよ」

って、パッカーンって割ったっけ、中からめんっこい女の赤子が生まれて、

「いやあびっくり、俺たちにな子どもいねえからよお、神様がくれたんだあ、ありがてえ、ありがてえ」

さあ瓜から生まれたからうりこひめって名付けて、大事に大事に育てたんだと。

さ、うりこひめ、生まれたときから、めんこくて、目クリクリっとしてな、だんだんだんだん年頃になったっけ、きれいな娘になったんだと、それから村で一番の機織りの名人、カタンコトンカタンコトンシュッシュ、カタンコトンカタンコトンシュッシュ、

「いやあ今日もやってるなあ、んだともなあばさま、うりこひめ毎日同じ着物ばかり着てよ、かわいそうだからなあ俺たち、町さ行って、着物買ってきてやるべ」

「んだなあ、うりこひめ、おめえなあ、今まで一人になることねえから、俺たちよ、これから町さ行って、おめえの為にあげえ着物買ってくるからよ、頑張ってな、留守番してろ、わかったか、んだともなあ、一つだけ言っておくぞ、あの、山の向こうからな、アマノジャクって言うな、いたずら坊主が、時々村さやってくるからな、どんたなことあっても、戸開けたらだめだぞ、わかったか？行ってくるからなー」

「うん」

うりこひめ、ほんとはおっかなかってども、頑張ってカタンコトンカタンコトンシュッシ

ユ、カタンコトンカタンコトンシュッシュってやっていたっけ、どこからか風の音がヒュー、あれ？風っこ吹いてきた？それからまたカタンコトンってやったけ、ピューと風吹いてきて、家中がガタガタガタ、

「ありゃあなんだべ」

と思って、耳澄ませたっけ、どこからか、

「うりこひめ、うりこひめ、遊ぶべ遊ぶべ」

「ああ、じさまの言ったアマノジャクだなあ。だめだだめだ」

「うりこひめ、遊ぶべ」

「おら遊ばねえ、じいさまがどんたなことがあっても戸開けたらだめだって言った」

「あのよお、ちょっとだけでいいからよ、小指くらいでいいからよ、開けてけろ」

んだども、うりこひめ、

「アマノジャクって、どんたな顔してるべ、これくらいだったら開けても、大丈夫じさ入ってこねえなあ、よーし」

って、そーっとちょっと、開けてしまったんだと、そしたっけアマノジャク、

「やったやったやったやったやったー」

って言って、うちの中さ入ってきて、家中をぐるぐるぐるぐるってまわって、

「えいえいえいえい」

ってあっちこっちのもの落として、暴れまくって、とうとう、うりこひめの着物剥がして、自分の服着せて、裏の肌げさぐるぐる巻きにってしまったんだと、そこさ

「うりこー、うりこひめ今帰ったぞー」

ってじさまとばさま、見てみる、赤い着物買ってきたからよ、ほれって後ろから来たばさま、

「てえへんだてえへんだじさま、それうりこじゃねえ」

「なにいもしかしたらお前はあの悪いアマノジャクだな、えいえいえいえい」

じさまそこさぐるぐるぐるっと巻き付けて座らせたんだと、そうしたっけアマノジャク、

「ウエーンウエーンウエーン」

て泣いてしまって、

「おらおら、おら悪いことした、おら友達欲しかった、遊ぶ友達欲しかったただけだ、どうかじさま許してけろ」

って何回も謝るから、じさまとばさま優しい人だから、

「よしわかった」

縄ほどいてやったっけ、あっちの山の方からぴゅーっと風吹いてきて、その風に乗ってアマノジャク帰ってしまったんだと、

「ああ悪かったなあ悪かったなあ、やっぱり一人にしねばいかった、痛かったべ痛かったべ、さ、赤い着物着ろ」

ってじさまとばさま、うりこさ赤い着物着せて、

「悪かった悪かった」

それからというもの、また、三人でいつまで一もいつまで一も幸せに暮らしたということ
だす。

どんど晴れ、おしまいです。

※1 じさまとばさま：おじいさんとおばあさん